

50年続く「バズ学習」を基盤に 集団の力で学力向上を図る

岐阜県 土岐市立泉中学校

授業で、清掃で、学活で――。土岐市立泉中学校は、約50年にわたり、学校生活のさまざまな場面で「バズ学習」を実践してきた。

進取の精神を大切に、生徒の気質や教育環境の変化に応じて、学校としての「不易」を守り続けている。

▼泉中学校に見る▼不易

人間関係づくりを基盤とする学力向上

あらゆる活動に

「バズ」を取り入れる

土岐市立泉中学校では、給食後の15分間に清掃活動を行う。4〜5人の生活班単位で、教室や廊下などそれぞれ割り当てられた場所を掃除するのだが、初めに「開始バズ」と呼ばれる、次のようなやりとりが行われる。

「掃除中の私語が多くなっているので、静かに掃除をしましょう」

「時間いっぱい、きちんと掃除しましょう」

「気付いたことがあれば、他の人の役割も手伝いましょう」

班長が進行役となり、その日の掃除の目標や班員の分担をてきぱきと確認してから掃除を行う。そして終了の放送が流れ始めると、掃除道具をしまい、同じように班長が進行役となり「終了バズ」を行う。ここでは、一人ひとり反省点を述べ、班員の良かった点も言い合う（写真1）。

学活にも、「バズ」が取り入れられている。例えば、学級で何か問題が起きた時、学級委



School Data

◎1947（昭和22）年開校。岐阜県の東濃地区を対象にした研修校。98年度からは岐阜大教育学部の教育実習協力校。「めあてづくり・自分づくり・仲間づくり」の精神を基盤にした教育を展開する。

校長◎桐井雅康先生

生徒数◎540人 学級数◎17学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒509-5132 岐阜県土岐市泉町大富1635-1

TEL◎0572-54-2295

URL◎<http://www.ed.city.toki.gifu.jp/izumichu/>

公開研究会◎未定



土岐市立泉中学校校長

桐井雅康

Kiri Masayasu

「向こう10年間、通用する教育をつくるため、ベテランこそ青臭い夢を語り、エネルギーを見せたい」

員の投げかけによって、生活班で今後、どうすればよいかを話し合い、クラス全体で発表する。また、学期の終盤や大きな行事が終わった後にも「バズ」を行い、良かった点や反省点を出し合って、次への目標を立てている（写真2）。

このように、泉中学校では学校生活のあらゆる場面で「バズ（Buzz）」を行っている。これは、「バズセッション」という話し合い

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行

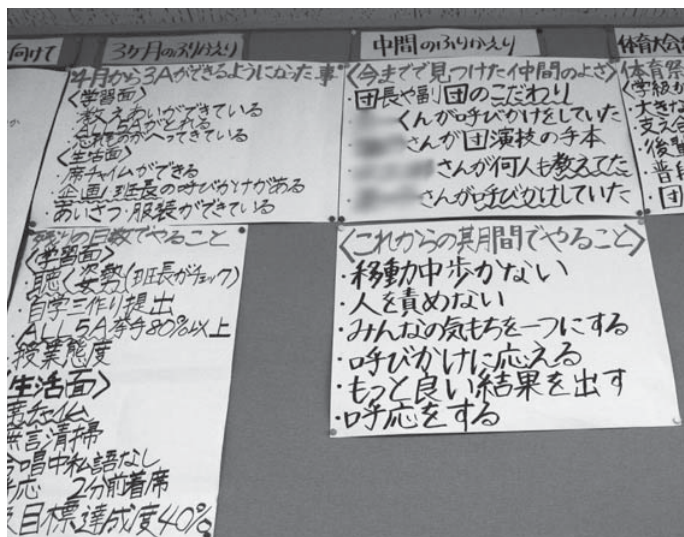


写真2 教室の後ろの壁には、クラスで時期ごとに振り返った内容を模造紙に書き、掲示している。これは学活での「バズ」で出てきた発言をまとめたものだ

「友だちに『ここが分からない』と安心して質問でき、質問された生徒が『何が分からないの？』と聞き返す。あるいは、友だちの発言に対して『それは違うと思う』と気兼ねなく指摘できる。そのような人間関係が出来てはじめて、授業での学びが深まり、一人ひとりの思考力や学力が高まっていくはずです。その上で、生徒から『先生、話し合わせて！』と声がかかるような授業を行えば、学びの質は更に高まるでしょう。単にグループ

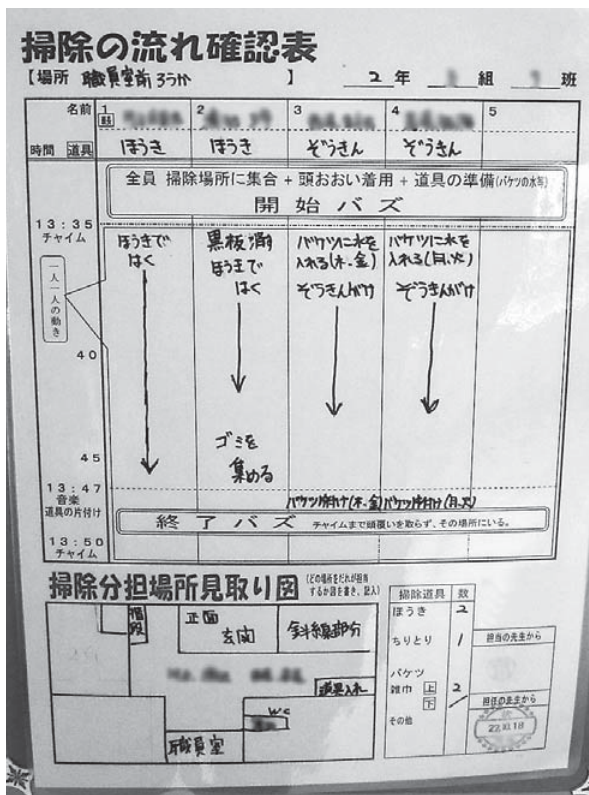


写真1 廊下の掃除用具入れに貼られた「掃除の流れ確認表」。「開始バズ」から「終了バズ」までの一人ひとりの動きを示している

の一形式のことだ。1グループ6人で6分間行うケースが多いことから「六六式討議」、また「バズ」がハチがぶんぶんざわめくことを意味するため「ぶんぶん討議」とも呼ばれている。同校は、このような人間関係づくりを基盤とする「バズ学習」を、50年近くにわたって発展させてきた(*)。桐井雅康校長は、その意義を次のように説明する。

個人↓グループ→全体へ段階を追って「バズ」を起こす

での話し合いを授業に取り入れるというのではなく、学校生活のあらゆる場面で生徒の人間関係を築きながら進めていくのが、本校の目指す「バズ学習」です」

授業には、どのように「バズ学習」を取り入れているのだろうか。桐井校長が先頭に立って作成した「バズ学習」の流れと指導のポイントを見てみよう(P.14図1)。

①「個人内バズ」を起こす

まず事象を提示し、生徒に既習事項との「ずれ」を認識させる。「なぜ?」「どうして?」という驚きや発見、感動、すなわち「心のざわめき」が生まれるきっかけとなるからだ。驚きや発見などが自然と出てくるような課題を、教師がいかに設定できるかが重要となる。

②「ペア・グループバズ」を行う

協同学習ともいわれる活動で、ペアもしくはグループで自分の考えや方法を説明し、他のメンバーの考えや方法を学ぶ。

③「全体バズ」への移行

各グループの意見を持ち寄って学級全体で話し合い、自分の考えを深めていく。他の意見や考えを聞き、賛否や疑問について話し合いを深めていく。

*バズ学習については、同校のウェブサイト「泉中学校 特色」で詳しい解説がご覧いただけます。<http://www.ed.city.toki.gifu.jp/izumichu/>

このような授業を行うことによって、「もっと知りたい」「他の方法はないか」と生徒の自主的な学習を促すことが、同校の目指す学びの姿だ。

『バズ学習』を授業に位置づけるとどうなるのか。先生方が具体的にイメージできるように、教科の特性や単元に応じて『習得系』と『活用・探究系』の2パターンの授業モデルをつくりました(図2)。教科や題材、その授業の位置付けによって、『バズ学習』の取り入れ方は異なります。単元の導入で生徒にインパクトを与えるためにはどうすればよいか、単元の終わりにまとめとして行うにはどうすればよいか。それぞれに合わせて『バズ学習』を取り入れることが大切です(桐井校長)

「バズ学習」が学校の荒れを収めやがて学校の看板に

同校が「バズ学習」を始めたのは1962年のことだ。同校は荒れの最中にあり、生徒の人間関係の土台づくりを促す手立てとして取り入れられたという。これが大きな成果を出し、学校は落ち着いていったため、その後「バズ学習」は教育活動の中核となっていた。33年前、初任で同校に赴任した桐井校長は、当時からのように振り返る。

「私は『バズ学習』のことを何も知らず、

図1 「バズ学習」の流れと指導のポイント

生徒への投げかけ		指導のポイント
事象との対面 <ul style="list-style-type: none"> あれえ? なんで? すごい! どうやった? みつけた! うーむ? 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒から自然発生的に課題につながる疑問が起こる事象提示が望ましい 教師から、「～を工夫して～しよう」の形で提示する習熟的課題と「～は～であることを証明せよ。～を使って解け」のように既習の応用型課題と生徒の疑問を「～となるのはどうしてか」とくり直す活用探究型課題などの課題類型が、教科や単元等によって考えられる 	<ul style="list-style-type: none"> 既出の知識・常識・予想と「ずれ」る事象との対面 驚き、発見、感動、憧れの起きる事象との対面の工夫
課題の成立 <ul style="list-style-type: none"> なぜ、どうして? 理由は何だ? どうすればいいか 		<ul style="list-style-type: none"> 個性差、能力差に対応する手立ての準備(要援助生徒の学習への対応) 本時(本単元)、誰を、どんな理由で、どのように揺さぶりたいのか
個人内バズ <ul style="list-style-type: none"> もしかしたら きつこうやれば たぶん違くない 根拠をもって仲間に言えるように自分の考えをまとめる(似た体験はないか、何を調べればよいか) 自問自答して考えを練る(本当にそうか、どうしてそういえるのか、どの資料からそういえるのか) 	<ul style="list-style-type: none"> この結果から本当にそういえるのか 違う方法でも同じ結論が出るか 発想や視点を変えたときどうなるか みんなはそう言うが、先生はちがう これについては～という考えもあるかどうか こっちの資料ではどうなのか 	<ul style="list-style-type: none"> 仮説、具体的追究方法の見通し どういう結論が出ればよいか
グループバズ <ul style="list-style-type: none"> 僕はこう思うが、君はどう思う、ならばこうしてみよう どこまで分かり、どこが分からないかを明らかにする 誰が、どこで、何をし、注意は何で、どういう結果を求めるためにするのか 		<ul style="list-style-type: none"> 質問・付け足し・反論・補足 複数案も可。無理矢理一つに結論づけられない 曖昧なままで進めない
探究・検証活動 —全体バズ <ul style="list-style-type: none"> 何がどうなればそうだとはいえるのか 誤差はどこに原因があるか 他の理由・考えはできないか 違う考えや方法をしている人をどう考えるか なぜそう考えるか、理由をもっと聞きたい 私には何か腑に落ちないがみんなはどうか 〇〇さんとちがって、〇〇さんとよく似ていて、〇〇さんに聞きたいけど、ということは…(思考を深める話形の指導) 	<ul style="list-style-type: none"> 他でも通用するか 日常ではどこに使われているか 別の確かめ方、考え方はないか 過去に習ったこととどうつながるか なんだかよく分からん 	<ul style="list-style-type: none"> 実験結果・教科書表記・人の意見を簡単に認めさせない(疑い、拘り、発展させる姿を重視) 座席表・個人メモの活用 複線・副案を持った指導 「ゆさぶり」「やま」のある指導(単元指導)
後を引く終末 <ul style="list-style-type: none"> 他でも通用するか 日常ではどこに使われているか 別の確かめ方、考え方はないか 過去に習ったこととどうつながるか なんだかよく分からん 	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇さんの意見がすごかった。〇〇さんの意見で深まった 家に帰って調べたい よいことだと分かるが自分にできるだろうか ここを直して、再挑戦したい 	<ul style="list-style-type: none"> 強引にまとめない。次の時間に思いがつながる終わらせ方の工夫

*同校の資料を基に編集部で作成

とにかく関連する本をたくさん読んで勉強し、先輩方から言われたことに精一杯、取り組みました。当時は全国的に『バズ学習』が広まり始めた頃で、最新の教育活動を取り入れているという自負もあったと思います」

同校は76年、89年、2000年と、全国バ

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行

「目先の生徒指導に追われた時期もありましたが、『仲間と共に頑張りたい』という生徒の気持ちにこえ、より良い集団をつくりながら学習を進めるためには『バズ学習』しかないという思いが、どの時代でも教師の間にあつたからだと思います。学校の荒れに対しては、学級経営を重視した活動の見直しを行い、活動が形骸化しつつあつた時は生徒会活動の活性化を通じて立て直すという具合に、その都度、『バズ学習』の重点や意義を見直してきたのです」(桐井校長)

ズ学習研究大会の会場校になったこともあり、「バズ学習の学校」というイメージが定着していった。

しかし、長らく続けられてきた同校の「バズ学習」の歩みは、決して平坦だったわけではない。例えば、全国的に中学校の荒れが顕在化していた1970年代末〜80年代頃には、仲間や教師から1日の行動を細かく規定されがちな「バズ学習」に対して生徒の抵抗感が強まり、学校が落ち着きを失つたことがあつた。また、ここ10年ほどは、「バズ」の方法論のみが踏襲され、肝心の生徒の自主性を伸ばせていないのではないかとという反省が校内で論議されていた。

しかし、それでも同校は「バズ学習」をやめるのではなく、その時々状況に応じて、その在り方を見直し、伝統を守る道を選んできた。

図2 「バズ学習」取り入れた授業モデル

	家庭学習	本時の授業					家庭学習	
	準備する(個人)	教わる(教師)	試す(個人)	理解を確認(班)	思考する(教師・友)	深め合う(個人→班→学級)	習得を確認(個・班・教師)	修練する(個人)
習得系授業	<ul style="list-style-type: none"> ●教科書を読み疑問や概要をつかむ ●資料や材料を集める ●新出の語句の意味を調べる 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時学習する知識技術を教わる ●本時の課題追究に必要なとなる既習の知識技術を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ●練習問題を解いて理解を確かめる ●自分の疑問や考えをまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ●仲間に自分の考えや方法を説明する ●仲間の考えや方法を教え学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時学んだ知識技能をどう使うと解決できるか ●解決の手がかりとなる情報はどこにあるか 	<ul style="list-style-type: none"> ●仲間の考えに質問や意見することで自分の考えを深化する ●仲間と知恵を出し合うことで、新しい方法や追究課題を発見する ●改善し繰り返し練習する 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時分かったこと出来たこと ●まだ分からないこと ●さらに追究したいこと 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時覚えなくてはいけないこと ●もっと自分で調べたいこと
評価	<ul style="list-style-type: none"> ▲一次自己理解度評価 *4回分ほどの自己評価欄の評価表 	<ul style="list-style-type: none"> ▲事前理解度の挙手確認 ▲二次自己理解度評価 *挙手による理解度変化評価 		<ul style="list-style-type: none"> ▲三次自己理解度評価 *挙手による理解度変化評価 			<ul style="list-style-type: none"> ▲最終自己理解度評価 *挙手で確認。感想記入 	<ul style="list-style-type: none"> 確認問題プリント *疑問、まだ分からないことの記入
活用・探究系導入	家庭学習	本時の授業					家庭学習	
	準備する(個人)	課題をつかむ(教師から)	考える(個人)	計画する(班)	深め合う(個人→班→学級)	確認する(個・班・教師)	修練する(個人)	
	<ul style="list-style-type: none"> ●教科書を読み疑問や概要をつかむ ●新出の語句の意味を調べる 	<ul style="list-style-type: none"> ●事象と対面し、追究課題をつかむ ●本時の課題追究に必要なとなる既習の知識・技術を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ●解決の手がかりとなる情報はどこにあるか ●自分の疑問や考えをまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ●仲間に自分の考えや方法を説明する ●仲間の考えや方法を教え学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ●仲間の考えに質問や意見することで自分の考えを深化する ●予測と結果を確認し改善し再度挑戦する ●仲間と知恵を出し合うことで、新しい方法や追究課題を発見する 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時分かったこと出来たこと ●まだ分からないこと ●さらに追究したいこと 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時覚えなくてはいけないこと ●もっと自分で調べたいこと 	
継続追究	家庭学習	本時の授業					家庭学習	
	準備する(個人)	教わる・学ぶ(教師から)	試す(個人)	確かめる(班)	思考・工夫する(教師から)	練り深め合う(個人→班→学級)	確認する(個・班・教師)	修練する(個人)
	<ul style="list-style-type: none"> ●教科書を読み疑問や概要をつかむ ●資料や材料を集める ●新出の語句の意味を調べる 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時学習する知識技術を教わる ●本時の課題追究に必要なとなる既習の知識技術を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ●練習問題を解いて理解を確かめる ●自分の疑問や考えをまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ●仲間に自分の考えや方法を説明する ●仲間の考えや方法を教え学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時学んだ知識技能をどう使うと解決できるか ●解決の手がかりとなる情報はどこにあるか 	<ul style="list-style-type: none"> ●仲間の考えに質問や意見することで自分の考えを深化する ●仲間と知恵を出し合うことで、新しい方法や追究課題を発見する ●改善し繰り返し練習する 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時分かったこと出来たこと ●まだ分からないこと ●さらに追究したいこと 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時覚えなくてはいけないこと ●もっと自分で調べたいこと
評価		<ul style="list-style-type: none"> ▲一次自己理解度評価 *4回分ほどの自己評価欄の評価表…挙手確認 		<ul style="list-style-type: none"> ▲二次自己理解度評価 *挙手による理解度変化評価 			<ul style="list-style-type: none"> ▲最終自己理解度評価 *挙手で確認。感想記入 	

*同校の資料を基に編集部で作成

生徒の変化に応じて活動を見直す

**現状に合わせて
形を変えながらも続けていく**

10年度、約25年ぶりに着任した桐井校長は、「バズ学習」の良さを生かし切れていない状況に對峙し、その見直しを打ち出した。

「『バズ学習』の根幹となる人間関係づくりが苦手な生徒が増えていることに課題を感じました。活動内容を見直し、早々に対応しなければと感じたのです」(桐井校長)

先に紹介した授業モデル(P.14図1、P.15図2)は着任早々の5月に示したものだ。同年には、これをアレンジして英語と音楽で研究授業を実施。更に、11年度の研究テーマを「バズ学習」とした。

「本校が目指すのは、一つめに生活の土台となる『学級集団づくり』、二つめにすべての学力層の生徒が個々の能力を高められるような『授業づくり』、そして、三つめは生徒が考えたい、深めたいと思う『仕掛けづくり』です。『バズ学習』によって、この三つを追究できると考えています」(桐井校長)

「バズ学習」の前提としては、生徒一人ひとりの学力把握が重要になる。参加できない生徒がいるような課題設定では、「バズ学習」

は成立しないからだ。同校では入学時に小学校段階の学習内容から作問した小テストに取り組ませ、生徒がどの段階でつまづいているかを把握している。これを少人数の指導や習熟度に応じた宿題にも生かそうとしている。

「よく考えて行動する力を育むための土台となる『読む、書く、話す、計算する力』を教科学習を通して保障し、高校へ、更には社会に送り出すことが、義務教育の責務だと思います」(桐井校長)

「バズ学習」を研究テーマとするに当たり、桐井校長は「学力とは何か?」という学力観を見直す必要性も、教師に投げかけた。

「学力には三つの要素があると、私は考えています。一つめは、課題におつかった時に逃げ出さずに解決に向かっていく意志。二つめは、課題を解決するために必要となる知識や技能です。仮に自分にそれがなくても、どこに求めれば得られるのかを探す力も含まれます。三つめは、チームをつくる力、つまり社会性です。自分一人で出来ることは限られていて、他者の力が必要だからです。このような学力を身に付けさせるためには、生徒が『どうしてそうなるのか』と疑問を持ったり、『やってみたい』と意欲をかき立てられるよ



写真 3年生の数学の授業での「グループバズ」の様子。4～5人の生活班単位で机を向き合わせ、互いに相談しながら学び合う

**生徒同士が助け合い
やり切る体験をさせたい**

うな授業でなければなりません。教師は『何かを解決することは面白い』と思わせるだけの授業を工夫すべきでしょう」(桐井校長)

現在の同校は、深刻な生徒指導上の問題は少ないものの、全ての生徒が落ち着いて授業を受けているわけではない。そこで、11年度中に『生徒指導マップ』を作成する予定だ。

「生徒指導上、どの時期にどのような問題が起きやすいかは、大体分かっています。それを月ごとにまとめた一覧表をつくっておけば、担任は計画性のある学級づくりをしやす

いのではないかと考えています」（桐井校長）

二つめの課題は教師の負担だ。同校は岐阜県東濃地区の教師を対象にした研修校のため、教師は多忙な毎日を送っている。

「新学習指導要領では教える内容が増え、力のある先生でも負担が増えます。しかし、それでも『バズ学習』のための準備が必要だと考えています。難しい内容でなくてもよいので、生徒同士が助け合って、自分たちでやり切った実感を味わわせる場を設けていきたいと思えます」（桐井校長）

生徒に本気で期待をかける 教師の真価はそこにある

桐井校長には忘れられない出来事がある。約20年前、ある学校で2年生の担任をしていた時のこと。「俺は頭が悪いから高校には行けん。授業は俺には関係ないし、内申書に何を書かれようが怖くない」と言い、授業をきちんと受けようとしないう生徒がいた。桐井校長は、「人をお前を馬鹿だと言ったとしても、『俺はやれば出来るで。今に見ておれ』という気持ちがあれば、いつか出来るようになる。高校へ行こうとする努力もせずに、行けないと決め付けるのは最低だ！」と叱った。すると、翌朝、その生徒が職員室を訪れてきた。「先生、俺でも本当に高校に行ける？」

「行けるかどうかは分からない。決めるの

は高校だから。でも、行くための努力は自分
が出来ることだ」

「やってみるわ」

結局、生徒は高校に進学。成人式の時にその生徒と再会した桐井校長はこう言われた。

「それまで会った先生は、自分がいなければいいのと思っているのが伝わってきた。でも、桐井先生は本気で自分のことを心配して怒ってくれた。先生のこと忘れません」

これが教師としての原点と桐井校長は話す。「生徒には『今は出来なくても、いつか出来るようになる』と折に触れて伝えていきます。

教師の真価は、教える知識や技術が長けていることではありません。どれだけ本気で生徒に期待をかけているか。心からその教科が好きで、生き生きと教えられているか。人が人を変えるのは、そうした姿を見せられるかどうかにかかっていると思うのです」

桐井校長は、目の前の仕事に追われ、先生方の教育への情熱が低下しているのではないかと懸念する。

「優れた教師を育てようと思うならば、上に立つ人間が熱くならなければなりません。まず自身が教育への情熱を見せ、それが他の先生方にじわりと伝わればと思います。気になる生徒がいたら、その生徒を授業に振り向かせるために挑戦する。そのことで教師として大きく成長するのではないのでしょうか」

今年度から「バズ学習」の再構築に向けて

桐井校長が考える教育の不易

私が生徒や先生方に常々話しているのは「たとえ今は能力差があっても、未来もずっとそのままの状態ではない」ということです。今は出来なくても、「これで終わってしまう自分ではない」という意識があれば、どん底に落ちても次のステップに進もうとする意欲が湧きます。

社会の変化に応じて打つ手は変えていかなければなりません。しかし、子どもたちが大人になった時、より幸せな生活を送り、より良い日本をつくるための力を育てるという私たちの役目は変わりません。次世代を育てることは、教育者という前に人間としてしなければならないことだと考えています。

泉中学校では新たな挑戦が始められている。桐井校長は、生徒も教師も常に考える集団づくりを目指していると語る。

「『向こう10年間通用する教育方式をつくる』と呼びかけ、私なりの案を出しました。私はそれを否定されても構いません。最も怖いのは受け流されてしまうことです。『自分はどう考える』と意見を出すことが議論を進めるのです。私たち教師も『バズ学習』のような話し合いを重ね、新たな教育活動を生み出していききたいと思えます」（桐井校長）